

文学に描かれた戸田の日露交流

安元隆子

The depiction in the Russian trilogy concerning an exchange between Japan and Russia in village Heda

Takako YASUMOTO

When Admiral Putyatin comes to Japan for the conclusion of the Treaty of Shimoda in 1854, his Russian frigate *Diana* is struck by a tsunami and goes down upon the waters. However, he decides to build a new boat with the help of Japanese citizens. Construction of the boat is completed in the village of Heda by the united efforts through mutual cooperation between Russians and a great number of people in Japan. The Russian trilogy, *Tsunami*, *Heda* and *Shimoda*, written by Nikorai Zadornov, depicts the important event on the basis of historical facts. The present article examines Zadornov's work, focusing on the four couples of Russian sailors and Japanese women who have fallen in love with each other.

【はじめに】

2015年は日露和親条約締結から160年の年。条約締結の前年、1854年に来日したプチャーチンをはじめとするロシア人と伊豆の下田・戸田や富士の宮嶋の人々の間には、安政の大地震に伴う津波に起因するディアナ号の沈没と代替船建造を通して交流が生まれた。特に、約3か月の間ロシア人が滞在した戸田村では、ロシア人の住居は指定されていたとはいえ、鎖国時代に外国人の居留を定められていた長崎の出島以外の場所で、約500名ものロシア人が滞在し、生活を共にしながら洋式帆船の建造を一緒に成し遂げたという、まさに日露交流の原点というべき画期的な出来事が繰り返し広げられたのである。

では、この出来事を文学はどのように描いてきたのだろうか――。

1 日露和親条約の締結とヘダ号の建造

まず、日露和親条約締結とヘダ号の建造の経緯について、振り返る。

日本との和親修好・国境画定・交易・漂流民の扱いなどを求めてプチャーチン率いるロシアの使節団が「国書」を持参して来日したのは1853年7月。この1か月前、アメリカのペリー提督が浦賀に来航していて、翌1854年3月、日米和親条約が締結され、下田・箱館開港が決まり、同8月には日英和親条約が結ばれ、長崎・箱館開港が決まった。ロシアとは幕府全権応接掛・川路聖謨が対応し、全6回、長崎での日露会談を行っている。この間にクリミア戦争が勃発し、ロシア使節団は一時日本を離れたが、1854年10月、プチャーチンはディアナ号にて再来日し、箱館、大坂を経て、下田が交渉場所選ばれた。ロシアはあくまでも平和的交渉をめざし、11月1日、2日の応接儀礼の後、3日に福泉寺で日露会談が始まったが、その翌日の4日、紀伊半島を震源とする、マグネ

チュード8.4の安政の大地震が起こり、下田全戸856戸のほとんどが地震と津波で全壊流失した。下田湾に停泊していたディアナ号は30分間に40回転以上し、大砲1門が脱落し、乗組員が圧死した。しかし、ロシア人はこのような窮地の中、日本人の救助を申し出た。「魯戎」から「魯人」へ川路のロシア人の呼び方が変わったのは、こうした出来事を通して彼らの人間性を知ったからであろう。

しかし、ディアナ号も船体に痛手を受け、修理の必要があった。その修理の場に選ばれたのが伊豆半島の西海岸、戸田であった。戸田は三方が山に囲まれ、長く突き出た岬によって外界から湾の内部が見えにくく、他国船に知られず修理を施すのに最適な場所だったのである。11月27日、ディアナ号は下田から戸田に向けて移動を始めるが、天候が急変し、富士郡宮島村海岸沖に流されてしまう。28日には浸水し、乗組員はボートで上陸を試みる。その姿を見て地元民は救出活動を行った。30日にはディアナ号は傾き始め、12月2日、無人のディアナ号を戸田へ曳航しようと地元の漁船で綱を引くがそこに再び嵐が襲い、ディアナ号は沈没してしまう。ロシア人乗組員約500名は徒歩で戸田へ移動し、プチャーチンは代替船建造を願い出、聞き入れられる。というのも、この頃、相次ぐ外国船の来航を受け、江戸幕府は鎖国政策に基づく大船建造禁止令を解き、洋式軍艦建造を試み、品川沖の砲台築造に着手していた。代替船建造に伴うロシアへの積極的な支援は西洋の造船術習得の絶好の機会でもあったのだ。ロシア側も沈没する前に帆船建造論文と製図をディアナ号の物資より発見したことが幸いした。そして、戸田でロシア人と日本人は協力してスクーター型と呼ばれる幅7メートル・全長22メートル・約80トンの船の設計、建造を開始したのである。造船取締役には伊豆代官の江川太郎左衛門英龍が任命され、現場管理と物資の調達はその家臣団があたった。造船御用掛には8名が選ばれ、名字帯刀を許されて士分となった。造船世話掛には7名の船大工があたった。そして、西伊豆の鍛冶職人や船匠ら約190名が動員された。戸田では、言葉の壁、単位の違い、材料の収集など困難も多かったが、自然と戸田の人々とロシア人の間には相互理解が

生まれ、両者で完成させた掛け軸や、ロシア人のあだ名やロシア語の挨拶など、素朴な人々の交流の様子を彷彿とさせる記録が残っている。

設計施工から3ヶ月、代替船は完成した。プチャーチンは戸田への感謝と敬意を込めて、この船をヘダ号と命名した。そして、3月10日に進水式を終え、3月22日に帰国の途に着いている。この代替船建造作業にかかわった戸田の船大工たちの後の活躍は華々しく、例えば、上田寅吉は日本海軍の母体・長崎伝習所へ赴き、榎本武揚と知己になり横須賀造船所の技士長になっている。この上田を筆頭に、船大工たちは石川島造船所、大阪、品川などで、戸田で得た技術を糧に活躍した。日本海軍の創設者とも言われる勝海舟の言葉を借りれば、まさに「此魯国の一大不幸や我が幸となり、…我邦絶えて無き処、是を一時に備ふ。豈に邦家の幸いと言はざるべけんや」（『海軍歴史』）だったのである。

そして、安政の大地震発生3日後から日露和親条約の交渉は再開され、1855年2月7日に締結に至った。

2 戸田の文学化の現状

このような戸田の人々とロシア人との物語は、日露交流史の上では非常に重要な位置を占めるが、残念ながら本格的に文学化されているとはいえない。日露和親条約締結に伴うロシア側の全権を担ったプチャーチン¹の人物像に迫った『プチャーチン』²は書かれているものの、あくまでも歴史研究の成果であり、文学ではない。同じく日本側の全権を任された川路聖謨³については、吉村昭が『落日の宴 勘定奉行川路聖謨』⁴を著している。が、条約を締結した川路の生涯を描くことに主眼が置かれ、戸田における日本人とロシア人の交流が中心の物語ではない。戸田で代替船建造の中心的役割を果たした江川太郎左衛門英龍⁵についても、葦山の反射炉の世界遺産決定と共に注目されつつあるが、やはり歴史研究としてのアプローチが主である。

ここで比較したいのが、漂流民としてロシアにわたり、初めて日本に帰国しロシアの様子を伝え

た大黒屋光太夫である。光大夫については井上靖が『おろしや国酔夢譚』⁶、吉村昭が『大黒屋光太夫』⁷を著している。また、日露の衝突を回避するためにゴロブニン開放の交渉を日本の代表としてたった一人で行った高田屋嘉兵衛については司馬遼太郎が『菜の花の沖』⁸を執筆し、その中で交渉に向けて繰り広げられたディアナ号の副艦長リコルドとの人間的な交流を見事に描いている。こうした日露交渉史の文学化を見れば明らかなように、「物語」を生成するためには通常「主人公」が必要である。しかし、戸田の物語を支えているのは、英雄とは言い難い、名もなきロシア人と日本人たちであり、庶民の「群像」を小説化することは難しかったと予想される。戸田の人々とロシア人の交流の物語を小説化した作品は管見ではほとんど見あたらない。

そのような中で注目されるのが、ロシア人、ニコライ・パヴロヴィッチ・ザドルノフ⁹の作品である。日露和親条約締結のためにディアナ号に乗って日本に赴いたプチャーチン提督およびロシア人乗組員と、伊豆の人びととの交流の姿を史実に基づきながら描いた1972年の『津波』、1975年の『下田』、1979年の『戸田』の3部作である¹⁰。これらは西本昭治氏¹¹によって日本語訳されている¹²。次にこの3部作について、西本昭治氏訳を用いて検討する¹³。

3 ニコライ・ザドルノフの日露交渉を巡る三部作

この3部作は日本語翻訳で上下2段組み、計2000ページを超える大作である。日露和親条約締結のために来日したプチャーチンを主流にしつつ、関係するロシア人および日本人群像を幾筋もの支流として描いた壮大な歴史小説であり、トルストイの『戦争と平和』を彷彿とさせる。また、日本とロシアの二国間の関係だけではなく、アメリカやイギリスの動きについてもページを割いて、日露和親条約締結を同時代の国際関係の視点に立って描いている。そして、文学である以上、史実そのものではなく、作者の歴史解釈が作品に彩を添えているはずである。本・三部作のザドルノフの場合は、次のような点に特色がある

と考える。

① ロシアの平和的なアプローチの強調

日露和親条約締結の目的は、ロシア人が「開港と通商と国境画定の、この三つの件を解決しようとしている」(1-229)からである。「開港と通商」まではアメリカと同じであるが、ロシアに特徴的なのは「国境画定」という項目である。日露は隣国同士であり、両者の平和的な共存のためには国境画定が急務であった。ペリーが黒船で浦賀に押し寄せ「力」で開国を迫ったことは周知の事実であろう。まさに人口に膾炙した狂歌「太平の眠りを覚ます蒸気船 たった四杯で夜も眠れず」という状態だったのである。こうした方法とは異なり、ロシアは「機関や大砲を誇示して脅迫はしない。」(1-60)という相手国を尊重する姿勢を徹底的に貫いていることを強調している。なんにでもお上にお伺いを立てなければ決定することのできない優柔不断な日本に対し、ロシアはいらつきを感じながらも、川路とプチャーチンとの間には互いを尊重しあい、両国が平和に共存する道を模索する合意があったことが強調される。

川路はほのめかされたことを理解して言った。「意見の不一致あるともすべてわれら両国、平和に解決いたそう」「われわれ両国の関係は、各自の子を養うために各自の畑を耕す仲のよい農民同士のような、隣人の関係でなければなりません。われわれ両国は、お互いに相手を尊重しあう気持ちを子孫に遺言として伝えあいましょう(3-302)

② 幕府ではなく、天皇へのアプローチを強調

「將軍とは何者で、帝とは何者か」(1-93)という言葉が象徴するように、日本における二人の統治者の存在は海外諸国から見たら奇妙に映るのかもしれない。まさに「皇帝を不利にするのではなく有利にする革命なんて」(1-64)ロシア人には信じられないことだったにちがいない。しかし、「日本人の伝統的な物の考え方と日本の支配形態の二重性を尊重」(1-100)したのがプチャーチンだったとするのである。プチャーチンは明治維新の息吹を肌で感じ、これからの日本の在り方

を透視していた。結果、将軍にではなく、直接、帝に対してこそ開国をせまるべきである、と決し、「帝は、（中略）これからの、未来の権力者なんだよ、きみたち！」(1-63)と、江戸を目指したペリーに対抗して京都を目指し、大坂への寄港を決めたのだ。

・われわれの大坂訪問は、ヨーロッパの大国が将軍にではなく、帝に親愛のジェスチャーでしめす敬意の、最初のしるしとなるわけです。(1-99)

・「このプチャーチンも、（中略）あなたがた日本人に敬われている現人神を敬っております、」(1-291)

このように幕府ではなく、天皇へのアプローチを強調することによって、この後の江戸幕府の瓦解を予知するかのような「ロシア側の先見の明」を印象付けることになる。

③ ロシアの自負

例えば、「アメリカ人たちのところには、プチャーチンやゴンチャロフやポシェートのような、誠実な外交官や教養のある礼儀正しい真摯な人物は、いない」(1-167)、という個人の優秀性だけではなく「われわれがひかえているということ、この一事が、列強に対する抑えになっているのです。」(1-251)「使節はアメリカに対抗して強力な援助を日本に与え得ると確信している」(1-252)などの箇所に見られるように、ロシアという国の「力」を誇示していることに気付く。歴史小説として、史実を忠実に辿りつつも、ロシア側の自負を感じさせる箇所が多々あると言えるだろう。

以上のような特色を持つと考えられる三部作だが、本論では、ディアナ号沈没と代替船建造に伴う日露庶民の交流がどのように描写されているのか、を問題としたい。以下、この点について表現を追いながら考察していく。

4 ロシア人水兵と日本人女性の恋

まず、ディアナ号が下田から戸田に移動中、嵐に遭遇し、命からがら乗組員たちが富士の宮嶋に辿りついた時の日本とロシアの人々の交流につい

てである。流されないように腰を数珠つなぎにし、砂浜に辿りつこうと必死になっているロシア人の姿を日本人はどのようにみつめていたのだろうか。

・「とにかくよ、おなじ人間たちが目の前で溺れ死んじゃうんだ。これは見てはおれん。ちょっくりどころじゃない辛いことよ」(中略)「溺れ死んじゃったほうが、御上はおよろこびだよなあ！」(1-312)

・『地震にあったばかりの人たち！ その人たちが』(中略)『焼け出された人たちにするように、ロシアの海軍軍人たちのためにできるかぎりのものを持ち寄ってきた。着ていた着物をぬぎさえもして……』(1-348)

というように、宮嶋の人々は「やるな、もらうな、付き合うな」が合言葉となっていた鎖国の時代に、ロシア人の窮地を同じ人間として理解し、助けようとしているのである。この宮嶋の人々の人間愛が日露の交流を実現させたことは言うまでもない。

しかし、こうした「人間愛」による国境の超え方とは別に、もっと原初的なエネルギーが国境を超えさせる時がある。それは「恋愛」——つまり、男女の結びつきだったのに違いない。ニコライ・ザドルノフは4組の日本人とロシア人の若い男女の恋愛模様を描いている。

① 宮嶋の「フミ」と「シゾーフ」

この二人の関係は、若い男女が国籍を超えて惹かれ合う典型的な描写であろう。例えば、「娘はことばはわからなかったが、真剣に、きれぎれに返事をした。シゾーフは娘をかき抱き、ふたりはそっと松林のなかにはいっていった」(1-341)。このペトルーハ・シゾーフは「彼女の運命」であった、とある。ふたりの関係は、ここ、宮嶋で終わることなく、条約締結の舞台となった下田の街の御奉行の屋敷に彼女が姿を現し、続いていく。そして、彼女は懐妊していた(2-427)。ザドルノフは、シゾーフが彼女をとっても愛し、なにもかも理解し、「なんでもできたのに、彼女に指一本も触れず、彼女を辱めはしなかった。」(2-428)と書いた。下田の街に彼を追ってきたフミに対す

るシゾーフの感慨は次のように表現されている。

- ・「ペトルーハ！」日本娘はくり返した。「忘レラレナイヨ！」『おれはこの娘を滅ぼしてしまったんだ』と水兵は思った。(中略)「一オロシヤの水兵と一度深い仲となったばかりにこの娘はこれから一生女郎屋でくらすことになるのか！」(3-321)
- ・一スクーター船の進水の翌々日、彼はあの娘に出会った。『やあ、フミじゃないか？おまえもきょうは暇をもらったのかい？』—「ペトルーハ！」彼女は言った。(中略)いまは彼女は娼家の下婢で、客の前には出ない。彼女は妊婦なのだ。ペトルーハ・シゾーフのむすこか娘かが、ここで大きくなるわけか？そのむすこか娘からあとで父親がだれか聞きだせるわけではないじゃないか！(3-412)

このように、彼女はロシア人に恋をし、妊娠し、ロシア人が去った後も男を非難することなく彼の愛を信じて父親の顔を知らない子供と共に生きていく運命を担う存在としてある。

ロシア人男性と日本人女性の結びつきは彼らだけではない。作者はなんと戸田村において3つの恋を描いている。先に記したように、条約締結に関する部分にはロシアの正当化が強調されているものの、残された記録に準拠して書かれている部分が多く、事実が中心となっている。しかし、これらのロシア人乗組員と娘たちの恋愛は、多分に文学的な想像力に基いて書かれている。というのも、残された記録の中で、唯一そうした男女間の恋愛を遠く想像させる部分は、川路聖謨『下田日記¹⁴』（第二回下田行）の二月二十九日にある次の部分だけである。

戸田村のいなか娘に、いささか渋ぬけたるが二人有り。いかにして知りけん、魯人其名を知りて呼び候由也。よき女にはなりたきもの也。

こうしたわずかな数行の記載から作者は戸田村に於いて3組のカップルの恋を創出したことになる。次に、それらを検証していく。

② ブクレエフとアキ

水兵のワーシャ・ブクレエフは牛ヶ洞沢近くのぼろ屋に立ち寄り、水を飲ませてもらったことが縁で、貧しさのあまり口減らしのために子供を殺すしかない、と主が考えているような貧しい「水呑み」一家の娘・アキと知り合い、互いに惹かれあい、そして、結ばれる。「水呑み」と呼ばれた貧しさの極みにある日本人の存在をロシアに知らせたことにも意義があろうが、

- ・水兵とアキ—娘の名前だった—は、おたがいに似ていた。(中略)こんなに熱く、たおやかな娘が、いま自分の手のとどくところに、(2-186)
- ・「ヤシヤ、あたい、あんたのせいで、ちいっところではにゃあ、つらいのよ」(2-196)

と若い男女が惹かれ合っている様子が素朴に描かれている。しかし、この娘がブクレエフに「あんたはどんなにしてもオロシヤには帰れないよ」と語る部分があり、それは「予言者的なひびき」があったとされる。ここには巧妙な作者の仕掛けが潜んでいる。実はこのブクレエフはアキの予言通り、ロシアに帰国することなく、日本で死に、葬られる。この二人の仲がみんなの口の端にのぼったころ、

「(前略)ブクレエフは夜中に柵を乗り越えて、抜け出した。そして例の日本娘のところに泊まって、長居をした。それからキャンプへもどる途中、苺を見つけて、まだ熟していないのに、それをたらふく食ったのさ」(3-275)

とある。このブクレエフの造形には、実際にこの戸田でナベワリと呼ばれた毒ウツギを食したことによって死亡したワシーリー・バケーエフがモデルになっていると想像できる。このように、戸田の白露の恋の一つは史実を取り入れつつ、哀れな結末を迎えている。

③ シビルツェフとオユキ

オユキは大田亀三郎の娘である。大田については「富裕な商人の大田亀三郎も同じ役を仰せつかり、おなじく士分に取りたてられた」(2-50)と

ある。大田亀三郎は戸田村の廻船業者で、幕府より造船御用掛を命じられ、士分として待遇され、帯刀を許された実在の人物である(1835-99)。ザドルノフはこの人物を「萌芽的資本家」として描いた(3-51)。この物語中、大田のむすめはロシア人からは「ミス大田」と呼ばれた「オユキ」である(2-233)。この大田は娘・オユキをロシア皇帝の親族のウーソフ士官候補生に近づけようと考えている。才たけた商人である大田は新しい時代の到来を察知し、ロシアの権力の中樞へ近づくために娘を利用しようとしている存在と描かれた。

では、いわゆる政略結婚の道具としてオユキが登場しているのかと言えばそうではない。オユキは父親の意に反し、ロシア人が村に入る時に先頭に立って号令をかけ歩いてきたアレクセイ・ニコラエヴィチ・シビルツェフ大尉に心ひかれる。彼は今後の戸田での生活はこの村への入り方いかんにかかっていると感じ、誇り高く恐れを知らぬ、容赦しない厳しい兵を印象付けていた。その様子を見たオユキは

・その戎は、美丈夫、一まさに天から降りてきた神のように、頭上に鋼の剣をかかげて歩いてゆく。(2-70)

・わっちらにはこの人たちの気持ちはわかる。でかい世界があることを、わっちらはつねに知っていた。この戸田村のどんなに無知で無学な者でも、この海のかなた、この海のきわまるところにその世界があることを—(2-70)

というように、初めてみる西洋の男たちに心魅かれ、その男たちの姿に遠い海のかなたの開かれた世界を夢想するのである。オユキはそのものおじしない積極性でロシア語を習い、彼への想いを募らせていく。そして、下田から戻った「シビルツェフの胸にまっすぐ勢いよくとびこんだ。そして彼の首にしっかりと抱きつき、接吻した」(2-524)。また、彼女は勢いよく異文化を吸収していく。たとえば、「ロシアの社交界の令嬢の仕草でドレスのように着物の裾をちょっとあげて膝をかがめてお辞儀をした。」(2-529)のである。こうした好奇心と心情の表出には、当時の日本女性とは異なる「新しい女性」のイメージが付与されている。同じ戸田の造船御用掛・野馬堂にも「あれ

は未来の日本の女だの。」(2-566)と言わしめる。

「(前略) やがてあなたはお船でおくにへ帰ってしまうんでしょうけど、あたしはいいわ、それきりもう死んだってかまわないくらいよ。でもしばらくでもとても仕合わせならよ！」シビルツェフは膝をつき、オユキを抱こうとした。「けどあたしはどんなことがあっても肌をゆるさないよ、あなたがあたしのことを真底好いてくれないなら！」(2-574)

というように、彼女は遊びではない真の愛情を求めている。この強い自我とプライドの高さが彼女の魅力でもある。このオユキとシビルツェフは結ばれる。しかし、聡明なオユキは二人に別れが近付いていることも理解していて、毅然とした別れをしようと決意している。しかし、その先があるとするならば…と考えずにはいられない。

『(前略) あたしはオロシャ^{ひと}人の抜きんでいてところがすっかりわかる。まもなくあたしにもお別れの時がくるのね。(中略)「ぼくはあなたを愛している。忘れないよ、ぼくは戦争が終わったら必ずあなたを迎えにくるよ、われわれがこの日本を開国させたのは、同じ世界であなたたちと暮らすためだったんだ」こうアリオサさんはそのとき言ってくれるだろうか?』(3-432)

一方のシビルツェフも「—オユキがかわいそうだ。オユキと別れるのはつらい。」(3-477)と、別れが近づいていることに苦しむ。しかし、迫りくる別れを前に、オユキは「あたしたちがどんなにあっさりとは別れられるか」「あなた自身があたしを西洋の習慣に慣らしたのよ」「悲嘆の涙にくれたり泣きわめく場面などないでしょうよ」(3-483)と感情を抑制し自立した女性として別れを演じようとしている。そして、このようなオユキもまた、シビルツェフの子供を宿していたのである。

オユキはやはりまだかすかな期待を持っていた。—あたしの目を見ているうちにアリオサさんはあたしのおなかにアリオサさんの子がいることに気づいてくれるわ、あたしのことを思いだしてくれることでしょうよ。(3-484)

このようなオユキは父親からはどのように見えていたのであろう。作者は次のように大田像を形成している。大田はオユキにシビルツォフが去った後に將軍の親族にあたる青年と結婚するよう勧める。

父親はオユキに先祖のことを話した。一うちの御先祖というのはポルトガル人の僧であったそうな、船の上で縛られてな、海中に投げこまれた、それを日本人が助けたいということだ……。 (中略) 「おまえの夫になるその人は西洋人にたいそう似てるだ。背が高く、美男だよ。本物の西洋の船乗りだ。海の学問を学びにヨーロッパへ遣わされる。川路様が僕におおせられただ、政府は十名の若い日本人をいま選んでおられるとな。この者たちが学修後、日本の海軍の艦隊を指揮することになろう、とな。政府はこの僕に造船所の開設を命じておられるだ。 (中略) 僕と彼の青年、つまり聳どのが、日本の艦隊をつくることになろう。 (3-494)

大田はこれまでの身分制度が崩壊し、新しい時代に突入することを誰よりも強く感じている。そして、外国人に対して否定的な見方を一切しない人物であり、現代の「国際結婚」を推進する立場の人物なのである。また、明治維新後の日本を予見し、資本主義の到来を透視しているかのような発言を繰り返す。経済の新しい動きとともに国際的な視野から人間の移動や交わりを推進するのが大田なのである。つまり、親子共に新しい時代の到来を象徴する人物としてあるのだ。オユキとツベルツォフの別れの場面は次のように描かれた。

日本人の習慣に反して、大田の娘は前にかがまず突っ立っている。大田父娘はみんなの前で戸田村の大昔からの道徳を破壊している。大田の娘は戎の口を吸ったのだ。 (中略) 大田はこのところずっと娘と異人との犯罪的な内縁関係を保護してやってきていたのだ。 (中略) あたしはアリヨサとのこの別れを何によっても暗いものにはしないわ。敵との戦いの中でアリヨサの生命の終わることが予感されるからこそ、どんな犠牲を払ってでも、アリヨサの生命をアリヨサの息子のなかに保持

してゆく覚悟なの、そのことによってあたしは永久に慰められることでしょう。 (3-502)

彼女は別れの寂しさも、身ごもっていることも、そして、この別れの後に日本人と結婚することも打ち明けなかった。このような「日本の新しい女」が実際に存在していたかどうかはわからないが、少なくとも作者、ニコライ・ザドルノフは、日本の近代の夜明けをこの親子に託していることは事実であろう。

では、最後にコロコーリツェフとさよについて検討していきたい。

④ コロコーリツェフとさよ

「さよ」は野馬堂の娘である。「四百世帯人口三千人の戸田村の、たったひとりの侍」(2-46)それが野馬堂である。「三人の倅と六人の娘」を持っているが「大の気に入りは、さよである」(2-49)。そして、プチャーチンらの代替船建造に伴い、「戸田村造船御用掛を仰せつかったのだ」(2-49)。この「野馬堂」は、実在の戸田・勝呂家11代目弥三兵衛為忠のことと考えられる。野馬堂の家が幕府のお役所となっており、コロコーリツェフはそこに専用の机と腰掛を持ち、船の設計図を説明、指導しているが、実際、勝呂家には幕府側が滞在し、船の設計が行われていたからである。本作品中では「其の方の娘は洋式船の建造を取り仕切るオロシヤ将校ココロさん(コロコーリツェフ)と密通しておるといいうわさがあるが」(3-247)とある通り、その娘・さよとコロコーリツェフも男女の関係となる。

コロコーリツェフはもう野馬堂の家に寝泊まりはしていなかった。士官宿所に移っていて、夕方に野馬堂のところへちょっと立ち寄るだけだった。彼とさよとの仲は、もうだれひとり知らぬ者はいなかった。とはいえ、みんな黙っていた。 (3-404)

このように、二人の中は周知のものとなるが、さよがオユキのように積極的にロシア人を愛したかといえばそうでもない。たとえば、「この小柄な女の、その心は、近づきがたく、不従順のままだった。しかしからだは滑り動く影のいいなりになっていた。縛られていたかのように。」(3-262)

とあるからだ。さよはコロコーリツェフを愛してはいるが、オユキのように積極的、能動的ではない。こうしたさよの想いはコロコーリツェフとの別れの場面に象徴的に表されている。

「ああ、ああ、ココロさあん！ココロさん！やあい！もうこれっきり、去ってしまうのねえ！ひどいよお！せつないよお！あたしを捨てるのねえ！」さらに彼女はオロシヤ語で叫んだ。「アタシコノママココニ残ルノヨ！アナタニヨツテ懐妊サセラレタ女トシテ！アア……！」(3-428)

先のオユキの主体性、潔さとは異なり、捨てられてしまう女の悲しみを前面に表出している。しかし、コロコーリツェフは決して遊びで彼女と結ばれたわけではない。それは次の部分が示そう。

細い竹の骨に張られた黄色い絹のような紙に、巧みな組み合わせ文字が赤と緑で書きあげられていた、〈ЛЮБЛЮ（僕は愛する）〉と。(3-432)

このように、別れた後の残されたさよの身を案じている。一方でその父、野馬堂は先の大田と同じくこれまでにない日本人の感性でロシア人の子供を宿した娘を見つめる存在として描いている。

・一日本は、争論と葛藤のなかで、洋式帆船の初子を造った！この野馬堂は、この御政道との完全なる一致のなかで、邦家の榮譽のためわが家門に新しい洋種の日本人を造りあげようとしているのだ！これは、洋式造船術の生んだ木の奇跡よりも、いや、鉄の奇跡さえよりも、重要なものなのだ！これは生命の奇跡なのだから！この野馬堂ははかり知れぬほど幸福だ。(中略)すべて自分の流儀で。この儂には敵がある。その敵のうちで一番手強いのは大田だ。だがこの場合はその大田も敵ではなく、同盟者だ！(3-430)

・一しかし野馬堂は孫をだれにも渡したくはなかった。男の子が生まれたら、野馬堂は、その男の子を自分の後継ぎにしたいのである。一孫ではなく、儂の俵にしてしまうのだ。(3-514)

ロシア人の「種」を優勢なものとなし、血脈にそれを取り入れることを至上の喜びとしているの

が、野馬堂である。実際は孫であるが、子供にしたいというほど、ロシア人の血を引いた子孫を欲している。娘のことを心配するというより、彼なりの新しい価値観を全面的に正当なものとしている。洋式技術と血脈とを同等に論じるのは無理があると思うが、野馬堂は西洋の血の価値を信じ、それをわがものにしようとする存在として描かれた点が興味深い。

しかし、これはやはり特異な感性であり、周囲はそうではなかったことを次の部分が示そう。

さよを畳の上に投げると、若い代官は、片方の足をあげ、とんと跳ねた。さよはぞっとして見を縮めた。彼女は、代官が彼女の腹部を蹴り踏みつけようとしているのだ、とさとした。一御代官は職務で、あたしのお腹の子を殺そうとしているのだ。

腹部を守ろうとしてさよは、その美しい顔で最初の足蹴を受けた。(3-506)

以上、ザドルノフのディアナ号水没と代替船建造をめぐる3部作の中で、日本人とロシア人の庶民の交流を描いている場面を検証すると、それはロシア人と日本人の男女の恋愛という形で描かれていることがわかる。富士の宮嶋まで含めればそれは四組となる。それぞれ愛情の様相は異なるが、四組のうち三組の女性が懐妊していることは注目に値する。つまり、ザドルフは日露の血の交わりを重視していることになる。それと共にロシア人と関係を持つ日本の女たちは、ロシアの男に蹂躪されたのではなく、さよを除いて自ら積極的にロシア人を愛している。そして、別れに際しても、とりみだしたり、恨み言をいう女性は少ない。特に印象的なのはロシア人男性との恋愛を肯定的に捉えるオユキに代表される、「新しい女」としての造形であろう。男性に頼るのではなく、自らの意志で、対等に男性を愛そうとする女性が描かれていることである。そして、大田や野馬堂に見られる資本主義の先駆的存在や新しい価値観を持った男たちの造形もある。まさに明治維新後の日本を先取りしている存在として、戸田の人々を描いている点が注目される。

【終わりに】

長く鎖国が続いた日本に於いて、ディアナ号の代替船を建造するために戸田に逗留したロシア人たちは、私たちが思う以上に大きな意味を持つ。鎖国時代の日本に、長崎の出島以外の場所で、日本人庶民と共に生活した初めての外国人約500人の集団、それがロシア人であったこと、戸田で彼らに教えられた近代造船技術の習得が日本の近代化の大きな一翼を担っていることを忘れてはならないだろう。そして、「隣国」ロシアとのよりよい国際関係を築く端緒とすべく語り継いでいきたいものである。そのためにも史実の文学化は有効である。ニコライ・ザドルノフの執筆したこの三作からなる長編小説は、戸田の庶民とロシア人との交流について虚構を混えて描いている。その中心をなすのは宮嶋を含めて4組にのぼる男女の恋愛である。そして、日本の女たちはロシア人に犯されたのではなく、ロシア人の青年を主体的に愛している者がほとんどだ。もちろんそこにはさまざまな陰影があるのだが、中でもオユキの感性は印象的だ。そして、妊娠した女たちは新しい時代の象徴であり、彼女らにとって誕生する子供たちは決して穢れた存在としてあるのではない。希望の象徴であり、時代の先駆けとして描かれているのである。こうした江戸時代末期の新しい女、国際的な恋愛の造形は、ロシアから見た日本近代の実態をも逆照射していて、興味深い。

なお、中尾ちえ子著『つるし雛の港』¹⁵も戸田のロシア人と日本人女性の恋を描いている。ニコライ・ザドルフ三部作との比較については別の稿で考察したい。

【註】

- 1 ロシア帝国の海軍軍人。1803-1883年。1853年、日露和親条約を締結するなど、ロシア帝国の極東における外交で活躍。この功績により、伯爵、海軍大将・元帥となる。日本政府から勲一等旭日章が贈られる。川路聖謨は「真の豪傑」「鋭敏な思考を持ち、紳士的態度」と高く評価した。
- 2 白石仁章著、新人物往来社、2010年12月
- 3 1801-1861年。豊後日田の生まれ、川路家の養子となり、有能で異例の出世を遂げ、要職を歴任。勘定奉行、海防掛を務め、黒船来航に際し開国を唱える。長崎に来航したプチャーチンとの交渉を担当し、日露和親条約に調印。ロシア側は彼の人柄に魅せられたという。慶応4年、江戸城開城の際に自決。「見事に幕府と武士道に殉じた。」(山田風太郎「人間臨終図鑑」)と評価されている。
- 4 講談社文庫、2014年6月
- 5 江戸後期の幕臣、伊豆葦山代官(世襲8代目)。1801-1855年。江川家は源氏の流れをくむ中世以来の名家で、平安末期に伊豆に移住。太郎左衛門は洋学、近代的な特に沿岸防備に強い関心を持ち、反射炉を作り、日本に西洋砲術を普及した。海防についても建言し、異例の昇進をとげたが、勘定奉行任命を目前に病死。日本で初めてパンを焼いた人物としても知られる。『江川太郎左衛門の生涯』堀内永人、栄光出版社2013年7月、など。
- 6 文芸春秋社、1992年1月
- 7 新潮社、2014年6月
- 8 『文芸春秋』、1987年3月～1987年5月
- 9 1909～1992年。ソ連の歴史小説家。アムール河下流地方へのロシア人の移民の歴史を描いた『父なるアムール』の後、タタール海峡、オホーツク沿岸、サハリン島などを開拓していくロシア人探検家たちの姿を好んで書いた。
- 10 Цунами : роман Николай Задорнов, 1972
『津波』日露和親条約締結の使命を帯びたロ

シア使節プチャーチンが、ペリーと競争するように帆船・パルラダ号を旗艦とする四艦を率いて日本に赴き、長崎で(1853.8.22～1854.4.25)、露使応接掛・川路左衛門尉聖謨らと交渉の後、シベリア東岸に至り、帆船・ディアナ号に移り、再び日本に向かうところから始まる。箱館、大坂を経由し、1854年12月4日、下田に来航したプチャーチンがほどなくして地震と津波に遭遇し、大破したディアナ号の修理のために西伊豆の戸田に向かう途中駿河湾で嵐に遭い、ディアナ号は海底に沈み、プチャーチンと水兵約500名が新しく船を造る決意と共に富士郡宮嶋から東海道を通過して陸路戸田へ向かうまでを描く。

Симода: роман Николай Задорнов, 1975

『下田』プチャーチン指揮する水兵たちの戸田村入りから始まり、ロシア人たちが日本で最初の洋式帆船の建造に着手したこと、日露和親条約調印、ペリーの日米和親条約の批准書の交換がアメリカ軍艦・ポウハタン号で下田港に入ったアメリカ使節アダムスによって行われたこと、その間に下田に入港したフランス捕鯨船をプチャーチンが武力で奪おうとしたことなど、ロシア人と日本人とアメリカ人の交流が描かれている。

Хэда: роман Николай Задорнов, 1979

『戸田』戸田村での洋式帆船スクナーの建造の様子、ロシア水兵と村の女性との恋愛、江川太郎左衛門英龍の活躍と死、ロシアに亡命した橘耕斎、アメリカ船・カロライン・フート号でロシアへの帰還する一陣の様子、完成した洋式帆船・ヘダ号でのプチャーチンや第二陣の帰還、ドイツのグレタ号による残りのロシア人たちの離日が描かれている。

- 11 翻訳者。1926-2005年。山口県生まれ、旧満州国立大学ハルビン学院に学ぶ。ロシア文学専攻。『人生論』（トルストイ著、現代教養文庫）など翻訳が多数ある。

この3部作に関しては、膨大な資料を精査し、このような長編歴史小説に仕上げたニコ

ライ・ザドルノフの筆力は圧巻であるが、同時に、詳しい注の添加や方言の使用など、翻訳者がこの歴史的事実に深い関心を寄せ調査した成果が反映され、読者を大いに助けていることも忘れてはならないだろう。

- 12 『津波』1972年、日本語版『北から来た黒船』朝日新聞社 1977年
『下田』1975年、日本語版『北から来た黒船(2)』朝日新聞社 1980年
『戸田』1979年、日本語版『北から来た黒船(3)』朝日新聞社 1982年
- 13 引用箇所は(○—○○○)の形で示す。()内の先の数字は巻を、—の後の数字はページ数を表す。
- 14 東洋文庫『長崎日記・下田日記』1968年10月、p.155
- 15 文芸社、2012年9月

【主要参考文献】

- 『ヘダ号の建造—幕末における』戸田村文化財専門委員会編、戸田村教育委員会、1979年
- 『プチャーチン提督 150年の航跡』上野芳江、東洋書店、2005年
- 『日本幽囚記』ゴロヴニン著、井上 満訳、岩波書店、1960年
- 『長崎日記・下田日記』川路聖謨、藤井貞文・川田貞夫校注、平凡社、1968年
- 『日本渡航記』ゴンチャロフ著、高野 明・島田陽共訳、講談社、2008年
- 『駿河湾に沈んだディアナ号』奈木盛雄、元就出版社、2005年